φρομαλαρο と prm'nδ'r

―トハーリスターンとソグドにおける在地役人の比較研究―

宮　本　亮　一

はじめに
Ⅰ　トハーリスターンの φρομαλαρο「執務官」
Ⅱ　ソグドの prm'nδ'r「執務官」
Ⅲ　φρομαλαρο と prm'nδ'r
おわりに

は　じ　め　に

1990 年代中頃に発見されたバクトリア語文書群は，2012 年に刊行が完了し，その結果，イスラーム時代以前のトハーリスターンに関する未知の情報を我々に提供することになった[(1)]。そしてそこには，政治史的，地理的なものと並び，トハーリスターンの社会に関する情報が多く含まれていた。すなわち，バクトリア語文書の大部分が由来すると考えられるヒンドゥー・クシュ北麓のローブ Rōb には，khār（χαρο）と呼ばれる在地の支配者が存在し，その khār を中心とした社会が形成されていたことが判明したのである[(2)]。

ところで，1 世紀中頃，恐らくトハーリスターンに勃興したクシャーン朝は，当地に本拠地を定め，その支配領域を拡大させた政治勢力として史上に名高い。

(1)　バクトリア語文書群の概要については，Sims-Williams 1997 ; idem 2012c ; 吉田 2013 を参照。

(2)　khār を頂点とするトハーリスターン在地社会の支配階層については，宮本 2018 を参照。

その後も，近年中央アジアのフン，あるいはイラン系フンなどと呼ばれるキダーラやエフタル，さらには西突厥が，クシャーンと同様に当地に拠点の１つを定めたことが知られている。

これらの政治勢力の動向を解明するための重要な資料の１つとして，正史を代表とする漢語文献が挙げられるが，そこに記されている情報には現地を支配した上述の諸勢力に関する情報と，在地社会に関する情報とが混在している。具体的な例を挙げれば，かつて榎一雄は，エフタルの民族性を議論した際，漢語文献に見える一妻多夫の習慣に関する情報を利用したことがある（榎 1952）。しかし，バクトリア語文書が発見されたことにより，この習慣はエフタルがトハーリスターンに勃興する以前から存在したことが明らかになった[(3)]。つまり，漢語文献に記された情報を正しく活用するためには，在地社会に関する理解の進展が必須なのである。そして，トハーリスターンに限らず，古代中央アジアでは，上述のエフタルなどの諸勢力による支配体系と，在地の支配者による支配体系とが重なり合い，重層的で複雑な社会構造が形成されていたと思われ，そのような社会の実情を明らかにするためには，細かな問題を地道に解決してゆく他ない。

本稿では，このような問題意識のもと，トハーリスターンにおいて在地支配者の命令で行動していたと考えられる φρομαλαρο なる官称号についての考察を行う。ただし，バクトリア語文書から得られる情報は，これまで知られていなかった貴重なものであるとはいえ，断片的であり，バクトリア語資料だけに基づく考察には限界がある。そこで本稿では，トハーリスターンの北に位置するソグドの事例，すなわちタジキスタンのムグ山で発見された８世紀前半の文書群（ムグ山文書）に見える prm’nδ’r という官称号を併せて考察し，両者の比較を行うことで資料の不足を補いたい。

バクトリア語の φρομαλαρο とソグド語の prm’nδ’r は，共に「命令」を意味する名詞（Bac. φρομανο, Sogd. prm’n）に，「～を持つ者」を意味する接尾辞（Bac.

(3) BD I²: 26–29。もちろん，榎がエフタルに関する一連の研究を発表した当時，バクトリア語文書の存在は知られておらず，榎の議論を批判する意図はない。

-λαρο, Sogd. -δ'r）が付された形であり，原義は「命令を持つ者」となる（BD II : 276a ; IPNB II/8 : no. 204）。バクトリア語文書を解読した N. Sims-Williams は，φρομαλαρο に“steward”という訳を与えている（BD II : 276a）。一方，ムグ山文書の主要部分を翻訳した V. A. Livshits は，prm'nδ'r に特別な訳を与えていないものの（SECAS : 185），Sims-Williams は，キリスト教ソグド語文献に見える frm'nd'r を“steward, guardian”と訳しており，これらを「執事，管理者」などと和訳することが可能である（DCS : 77）。しかし，ソグドには，“keeper, steward”と翻訳される 'rspn という別の官称号も存在する（cf. SDGM III : 110 ; IPNB II/8 : no. 135）。そこで，本稿では便宜的に φρομαλαρο も prm'nδ'r/frm'nd'r も共に「執務官」と訳すことにしたい。

これまで，トハーリスターンの社会とソグドの社会が比較された前例は，婚姻契約を研究した I. Yakubovich の研究だけである（Yakubovich 2006）。しかし，両地域は，地理的に近接し，バクトリア語とソグド語という，同じ中期イラン語の東方言が用いられていたという点のみならず，共に前述したキダーラやエフタルの支配下に入ったという点で共通しており，これらの諸勢力の動向を解明するためにも，両地域の比較は有益であると考えられる。また，近年発表されたアケメネス朝時代のアラム語文書によって，この時代，トハーリスターン（当時はバクトリアと呼ばれていた）とソグドが１つの行政区画内にあったことが明らかになっており，両地域が行政制度的に１つの枠組み内にあったという事実は，両地域の比較研究を行うことが有効であることの重要な根拠となる[(4)]。

トハーリスターンの執務官とソグドの執務官，どちらの考察から始めても問題ないが，筆者の関心が常にトハーリスターンの諸問題にあることから，ここでは前者の考察から始める。

---

(4) Naveh & Shaked 2012 : 17-18, 21-22。両地域に共通して残るアケメネス朝時代からの伝統として，吉田豊が指摘する手紙のレイアウトを挙げることができる（吉田 2013 : 47-48）。ただし，ソグドではアケメネス朝時代以降もアラム文字の伝統が残り，アラム文字に由来するソグド文字が用いられたが，トハーリスターンではアレクサンドロスの東征以後ギリシア文字の使用が定着した。

Ⅰ　トハーリスターンの φρομαλαρο「執務官」

φρομαλαρο「執務官」の原義から判断すれば，この官称号を持つ者は，上位の者からの命令を受け，それを直接実行する，あるいは別の誰かに伝える役割を担っていたと推測できる。残された資料は少ないが，その内容からは，実際にこの推測を裏付けることが可能と思われる。以下，具体的な文書を挙げて検討してみたい[(5)]。

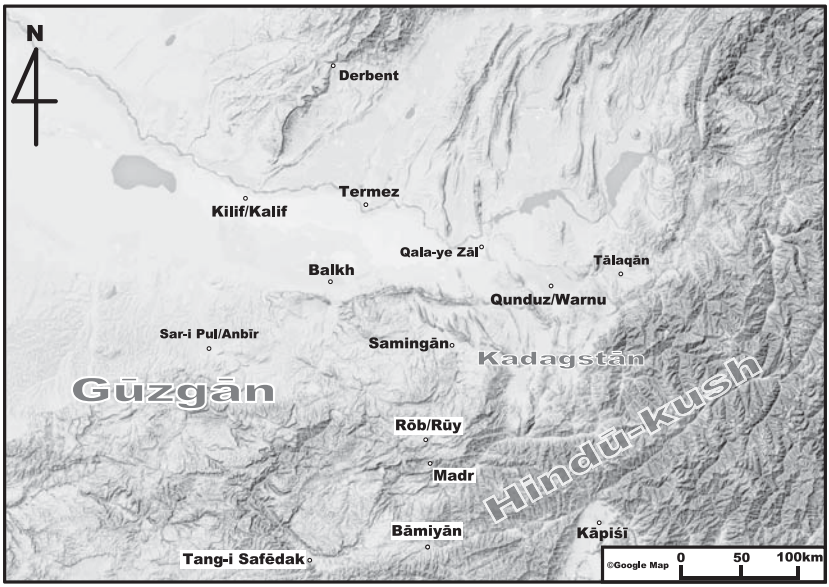
まずは，執務官から出された手紙を見てゆこう。Doc. bb は，執務官 Mihr-mareg から，城砦長 Khwadew-wanid へ宛てた手紙である[(6)]：

(1-4) 城砦長 Khwadew-wanind，親愛なる兄弟，親愛なる同胞，主へ，僕たる執務官 Mihr-mareg から，挨拶（と）敬意を。もし自ら貴方を健康（である）と見るならば，私はより幸せであるだろう。

(4-7) さて，貴方は，綾織工 Ohrmuzd が，私に（次のように）訴えたことを

(5)　本稿で用いるバクトリア語文書の理解は，基本的に Sims-Williams の理解に基づいている。バクトリア語の研究は古くから行われてきたが，本格的な研究は，一連の文書群の発見によって始まり，Sims-Williams の研究成果以外は存在しないのが現状である。このような状況で，言語の専門家でない者が文書を利用して研究を行うことの危険性は重々承知しているが，今後の研究で個々の単語の意味や文法の理解が改められる可能性があることを念頭に置き，研究を進めてゆきたい。なお，本稿では紙幅の都合上バクトリア語のテクストは掲載しないが，参照の便を考え，原文の行数のみ和訳に添える。また，バクトリア語文書のナンバリングについて簡単に説明すると，2 つの小文字で表記されている文書（Doc. ba）は，1 つの大文字で表記された紀年を有する文書（Doc. B）の年代に近い文書ということである。本稿では，バクトリア語文書に記される紀年（いわゆるバクトリア紀元）の換算については，de Blois の説（223 年を初年として換算）に従っている。バクトリア紀元の詳細や，紀年の記されていない文書の年代解釈の基準については，Sims-Williams & de Blois 2018 を参照。

(6)　本稿で考察する文書の大部分は手紙である。手紙の書式全般については，Sims-Williams 2006 を参照。



知れ：「Sag が Absigan 家からの命令を実行している」と。(7-8)今，貴方は，Ohrmuzd に…であれ。(8-10)何であれ，Sag が Absigan 家からの命令を実行していようとも，貴方は，王妃(7)（に対する）不敬を阻止せよ。（すなわち）内（廷）(8) への不敬を。(10-12)そして，貴方は Sag へ（次のように）命令を送れ：「来い。そして，そこで Ohrmuzd と協議せよ」と。

(7) βανο「王妃」と呼ばれる存在の実態は不明である。この語は，バクトリア語の木簡（Doc. am）にも言及されている（BD I^2 : 168-171 ; cf. BD II : 201b）。38 点の小さな木簡からなる Doc. am は，物品の分配，および受領の記録と考えられており，現在のところ，バクトリア語で書かれた木簡は本資料しか存在しない（cf. BD III : pls. 118a-122i）。ただし，当地域における同種の資料として，アラム語で書かれたアケメネス朝時代の木簡が知られている（Naveh & Shaked 2012 : 230-258）。また，『梁職貢図』中の滑国（現在のアフガニスタン北東部クンドゥズ辺り）に関する記事に見える「以木為契，刻之約物数」という一文は，上述の木簡の使用法について記したものであろう。

(8) 「内（廷）」と和訳した αβανδαρο という語は，通常「内側で」を意味する副詞であるが，Sims-Williams によれば，ここでは “inner（women's）quarter” を意味する名詞であるという（BD II : 181a）。

(13-15)城砦長 Khwadew-wanind へ，ご挨拶を。(BD II : 54-55)

手紙の内容を正確に理解することは難しい。しかし，綾織工（πριγγοοαβγο）の Ohrmuzd が，執務官 Mihr-mareg に対して，城砦長 Khwadew-wanind の管轄下にある Sag なる人物について訴え，Mihr-mareg が，そのことに関して，間を取り持つように Khwadew-wanind へ命令した，という大意は読み取れる[9]。さらに同じく，執務官 Mihr-mareg から城砦長 Khwadew-wanind への手紙（Doc. bc）には，以下のように記されている[10]：

(1-4)城砦長 Khwadew-wanind，親愛なる兄弟，主へ，僕たる執務官 Mihr-mareg から，挨拶（と）敬意を。もし自ら貴方を健康（であると）見るならば，私はより幸せであるだろう。
(4-7)さて，貴方は，Mihr-guzg が，主へ（次のように）訴えたことを知れ：「私は，仲間と共に…である。(7-8)そちらの町へ，（仲間に）随行することが，私にはとても相応しいでしょう」と。(8-13)そこで，主は，Mihr-guzg へ，次のように命令した：「仲間の財産に関して，お前達（Mihr-guzg と仲間）は，1 人の人間と共に[11]，宣誓で以って，私に信義を誓え。そして，お前達は自ら 1 人の人間を…せよ」と。(13-15)そして，彼（主）は，私に（次のように）命令した：「彼らを世話せよ」と。(15-17)今，貴方は，私のために，Mihr-guzg を世話せよ。(17-22)そして，誰であれ彼を非難する者や，Mihr-

(9) ここに登場する λιζοβιδο「城砦長」は，手紙文書に散見される官称号であり（BD II : 227b），バクトリア語文書中で χαραγανο「khāragān」と呼ばれる，在地支配者 khār と関係深い人物たち（現地の貴族階層）が帯びることが多い（宮本 2014 : 130-137 ; 宮本 2018 : 53-55）。バクトリア語文書に見える λιζο「城砦（あるいは都城？）」という行政区画については，宮本 2015 : 301-299 を参照。

(10) Doc. bc，および先に引用した doc. bb は 350 年頃に書かれたと考えられている（Sims-Williams & de Blois 2018 : 48-49, 67-68）。

(11) Sims-Williams は「1 人の人間と共に（αλο ιωγο μαρδο）」という文言に関して，この「人間」が人質であった可能性を考慮に入れ，“with one man (as a hostage?)” と訳している（BD II : 56）。

guzg に異議を唱える者を許すな。そして，私の面前で言葉があるまで，彼が罰せられることを許すな。(23-25)そして,… と共に … 彼の言葉，そこで，彼が拘束されることを許すな。

城砦長 Khwadew-wanind，親愛なる兄弟へ。(BDII : 56-57)

この手紙も内容を理解することは難しいが，前半部では，Mihr-guzg なる人物が主に対して何かを訴え，主がそれに対して Mihr-guzg に命令すると共に，手紙の差出人である執務官 Mihr-mareg にも命令を出したことが記されている。後半部では，主から Mihr-guzg とその仲間の世話をするように命ぜられた執務官が，その命令を城砦長 Khwadew-wanind へと伝えているようである。この手紙が出された後の事情は分からないが，手紙の内容通りに事が運んだとすると，主の命令は執務官を経由して城砦長へと伝わったことになるだろう。ただし，執務官と城砦長との間に身分の上下が存在したのかどうかは不明であるという点は，注意しておかなければならないだろう。

ここで注目すべきは，執務官へ命令を下している存在が，「主（χοαδηο）」と記されていることである。文書からは，この「主」が誰を指しているのか分からないが，筆者は，この「主」が，在地の支配者であるローブの khār を指すと推測している。その根拠となるのは，執務官から khār へ宛てた手紙（Doc. jb）である[12]：

(1-6)栄光持てるエフタルの yabghu（のもとにいる）ローブの khār[13]，エフタルの君主の書記，トハーリスターンとガルチスターンの裁判官，偉大な

⑿ 当文書は 485 年頃に書かれたと考えられている（Sims-Williams & de Blois 2018 : 73）。

⒀ Sims-Williams は当初，この部分を “the glorious *yabghu* of Hephthal, the ruler of Rob” と翻訳していたが（BD II, 126），吉田豊の指摘を考慮に入れ，ローブの khār がヤブグの称号を持つ可能性は低いと考え，翻訳を，“the ruler of Rob（under）the glorious *yabghu* of Hephthal” と改めており，ここでの翻訳はその改訂に従っている（Sims-Williams & de Blois 2018 : 131-132 ; cf. Yoshida 2003 : 158a）。

る主，Sart Khude-bandan へ，貴方の僕たる Ramin の執務官 Azgarak から，千回，万回のご挨拶（と）跪いて，神々に対するように，敬意を。(6-7)もし自ら（貴方様を）健康であると見て幸せになるならば，私はより幸せであるでしょう。

(7-9)さて，私は Spiy の事柄に関して尋ね，それがどのようであったかを聞きました。(9-10)しかし，盗人であった（彼の）仲間たち（？），彼らはここから立ち去りました。(10-11)彼らが帰って来る時には，Spiy（もまた）帰って来るでしょう。(11-13)私は，彼（Spiy）が帰って来て 10 日以内に，彼に担保を完全に返すよう，（彼らに）命じる（でしょう）。

(14)栄光持てるエフタルの yabghu（のもとにいる）Sart Khude-bandan へ。

ここでは，執務官が khār を「偉大なる主（βαγο χοηο）」と呼んでおり，この「主（χοηο）」とは，先に言及した Doc. bc に見える χοαδηο のヴァリアントである。もちろん，χοαδηο であれ χοηο であれ，この語は極めて一般的な言葉であり，これが常にローブの khār を指すわけではない[14]。しかし，ここに挙げた手紙から明らかなように，執務官は khār と直接手紙のやりとりをしており，執務官に命令を下す「主」が，ローブの khār であった可能性は十分にあるだろう。また，ローブの khār から執務官へ宛てた手紙も 1 点（Doc. xl）存在する（BDII : 156-157）。

さらに，ローブの khār と執務官との直接的なつながりを示す資料として，629 年に書かれた契約文書（Doc. N）があり，そこでは，契約の保証人として「ローブの khār の執務官 Suren（σορηνο ρωβοχαρανο φραμαλαρο）」が登場している（BD I^2 : 68-69）。管見の限り，この事例のように，「ローブの khār の」という語を付して言及される官称号は，執務官以外に存在せず，khār と執務官との強い関係を見て取ることができる。

では，khār の命令を伝えること以外に，執務官はどのような職掌を担っていたのであろうか。残念ながら，これを示す資料はほぼ存在しないが，本章の

(14) 手紙の受取人を「主」と呼んでいる事例が多数存在する（BD II : 278a）。

冒頭で提示したDoc. bbでは，執務官は揉め事の仲裁を行なっていたようである。また，執務官が登場する手紙（Doc. jh）には，次のような内容が記されている[15]：

> (1–3) Mihr-yazad，Ulishaganの神，奇跡的な方，恩恵をお与えになる方，高名な神々の王へ，その従者であり僕であるUlishaganの首領Nakinから，百回，千回，万回，ご挨拶を，跪いて，平伏して，頭をつけて敬意を。(3–5) もし，最も神々しい（方）への習慣のように，自ら最も神々しい貴方を健康（である）と見て，跪いて，平伏して，頭をつけて敬意を表するなら，私はより幸せであるでしょう。
>
> (5–7) さて，私がそちら，Ulishaganからやって来た時，執務官が（次のように言って）怒って私を捕えました：「お前が古い税も新しい税も持って来た時，Ulishaganまでは（税の）見積もりがまだであった」と。(7–8) 今，Sed-khanの執務官（の下）からある者がそちらへ行きましたので，彼に税をお渡し下さい。(8–10) もし，彼らが…なら，そして（もし），彼らが羊を彼に与えることを望むなら，そちらでGadosh… に羊を希望通りお渡し下さい。(10–11) 私はこちらでSed-khanの執務官に黄金を支払うでしょう。税に関して，これ以上いかなる遅れが生じることもお許しになられるな。そうすれば，罰金は多額にならないでしょう。(11–13) 私の（所有する）封印文書，（すなわち）Baz-wanindが債務者であった貸付契約書（に関しては），私は，罰金における彼の負担分として，そちらにそれを送りました。（それ）はBaz-wanindの債務履行（と見なされるべきもの）です。
>
> (14–15) Mihr-yazad, Ulishaganの神，奇跡的な方，恩恵をお与えになる方，高名な神々の王へ，百回，千回，万回，ご挨拶を，跪いて，頭をつけて敬意を。

手紙の受取人が「神」と呼ばれるのは，バクトリア語文書の中でもこの手紙

(15) 当文書は465–466年頃に書かれた手紙と考えられている（Sims-Williams & de Blois 2018 : 74）。

だけであり，在地の宗教を考察するにあたっては非常に興味深い資料と思われるが，この問題には立ち入らない[16]。ここでは，執務官が税の徴収を行っていたことに注目したい[17]。この手紙からは，執務官自らが税の徴収に出向いたのかどうかは判然としないが，手紙の7〜8行目にあるように，人を遣って税の徴収を行わせていたことは確実である[18]。

最後に，この官称号を持つ者が，様々な土地にいた可能性を指摘しておきたい。先に言及したDoc. jbに登場した執務官は「Raminの執務官Azgarak（αζγαρακο ραμιναγγο φρομαλαρο）」とあり，Raminという場所にいた執務官であることが分かる[19]。また，最後に挙げた手紙（Doc. jh）では，「Sed-khanの執務官（σηδχανο φρομαλαρο）」が登場しており，Sed-khanなる土地に執務官がい

---

⑯ Sims-Williamsは，BD IIのグロッサリーにおいて，手紙の受取人Mihr-yazd（μιυροιαζαδο）について“name of a god”と記し（BD II : 234a），出版時までに知られていたバクトリア語資料に見える全人名を網羅したIPNB II/7に，この名前を採録していない。しかし，この手紙の受取人は，差出人から税の支払いを要請されており，そのような存在の名前が，神格の名前だとは考えにくいのではないだろうか。

⑰ 本文中に見える「古い税と新しい税」という表現が何を意味しているのかは判然としない。バクトリア語文書と同地域で書かれ，後期のバクトリア語文書に見られる人物と同じ人物が登場することで知られる，初期アッバース朝時代のアラビア語文書には，複数年のハラージュを同時に支払ったことを記す受領証が存在している。文書の解読者G. Khanは，税の支払いが定期的ではなく，納税者に困難を引き起こしていたようだと述べている（Khan 2007 : 32）。イスラーム時代以前からトハーリスターンには定期的に税を支払う習慣がなかったのかもしれない。

⑱ バクトリア語文書中には，σωταγγο「sotang」という官称号が知られており，ニヤのカローシュティー木簡に見えるṣoṭhaṃgaとの関係が指摘されている（BD II : 266b）。ṣoṭhaṃgaは税として支払われる様々な物品を集める役割を担っていた（Burrow 1937 : 127-128）。sotangは執務官の下で活動していたのかもしれない。

⑲ この地名は，バーミヤーン以西における仏教の存在を明らかにしたことで有名な，タンゲ・サフェーダク碑文がはめ込まれたストゥーパから出土した貨幣にも見え，恐らく貨幣製造所が存在した地名であったと思われる（Lee & Sims-Williams 2003 : 172）。タンゲ・サフェーダク碑文が発見された地域の歴史地理に関しては，稲葉2007を参照。

たことになる。さらに，712/713 年に書かれた契約書（Doc. U）には契約の保証人として「Madr の執務官 Bay-rizm（βαιοριζμο μαδδρο φρομαλαρο）」という人物が登場しており，この土地にも執務官がいたことが分かる（BD I^2 : 106-107）。

これらの事実は，執務官という官称号を持つ者が，複数の土地に存在したことを示しているように見える。ここで言及した 3 点の文書のうち，2 点の手紙（Doc. jb, jh）がいずれも 5 世紀後半のものと考えられていることから（Sims-Williams & de Blois 2018 : 73-74），複数の執務官が同時に複数の土地に存在した可能性は十分に想定できるだろう[20]。

さらに，ここで注目したいのは，執務官がいたと考えられる Madr という地域が，バクトリア語文書中で þαρο/þαυρο という行政区画として記されていることである[21]。バクトリア語文書には，þαρο/þαυρο と呼ばれる地名は他にも知られており，þαρο/þαυρο ごとに執務官が存在した可能性が考えられる[22]。

さらに興味深いのは，サーサーン朝の行政機構を知るための最重要資料である王朝の公的な捺印物には，plm't'l という官称号が知られており，その plm't'l は，バクトリア語の þαρο/þαυρο と同語源の šahr「州」に関わる官称号であったと考えられていることである[23]。また，この plm't'l 以外にも，サーサーン朝

---

⑳ バクトリア語文書中に登場する官称号のうち，υωστιγο「hōstig」も，地名と共に言及される。この官称号については，宮本 2014 : 143-144 を参照。

㉑ トハーリスターンの行政区画については，宮本 2015 : 307-301 を参照。筆者はこの研究において，Sims-Williams の翻訳に従い，þαρο/þαυρο を「まち（city）」，ωδαγο を「地区（district）」と訳した。しかし現在，少なくとも þαρο/þαυρο に関しては，すぐ後に述べるサーサーン朝の事例を考慮に入れ，「州/領」などと訳しても良いかもしれないと考えている。この行政区画と在地支配者 khār との関係については宮本（2018 : 53）も参照。

㉒ 先述したように Ramin と Sed-khan という土地にも執務官がいた。資料からはこれらの土地がどのような行政区画に属していたのか分からないが，執務官が þαρο/þαυρο ごとに存在したのだとすれば，Ramin と Sed-khan も þαρο/þαυρο であった可能性がある。

㉓ Gyselen 1989 : 37-38。ただし，この plm't'l の捺印物には，3 つの州（Veh-Andiyōk-Shābuhr, Ērān-xvarrah-Shābuhr, Mihragan-kadag）の名前が同時に記されているものがあり，1 人の plm't'l が複数の州に関わっていた可能性がある。

時代の捺印物では，1つの官称号が，実に多くの地名と共に言及されている（Gyselen 1989 ; idem 2002 ; idem 2007）。これらの捺印物の正確な年代は分かっていないが，概ねホスロー1世（531-579）の晩年からオフルマズド4世（579-590）の治世初期，570～580年代のものと考えられており（Gyselen 2007 : 12-13），これは同じ官称号を持つ者が同時代に複数存在したことを示している[24]。サーサーン朝という広範囲な領域を有した王朝の行政機構と，トハーリスターンの在地のそれとを直接比較することは問題かもしれないが，地名と官称号が併記される同時代の事例として念頭に置いておきたい[25]。

Ⅱ　ソグドの prm'nδ'r「執務官」

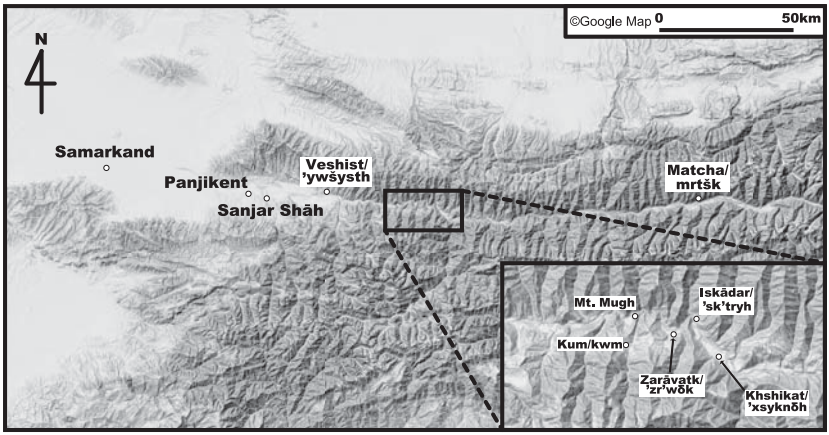
次に，ソグドの prm'nδ'r について見てみよう。この官称号が登場する文書の大部分は，Livshits が一括して研究しており，またその概要をまとめている（SECAS : 109-136）。ここでは，Livshits の研究に基づき，トハーリスターンの φρομαλαρο「執務官」との比較を行うことを念頭に置き，prm'nδ'r が登場する文書を改めて検討してゆく[26]。

---

(24)　例えば，所領を管轄していた ōstāndār，および会計官 āmārgar の事例を参照（Gyselen 2003）。

(25)　執務官に関係して，バクトリア語資料の中に，σαγολοχο οαζορκο φρομαλαρο という銘文を持つ捺印物が1点存在することを付け加えておきたい（IPNB II/7 : no. 404）。ここに見える οαζορκο φρομαλαρο「大執務官（？）」は，バクトリア語文書中には1度も登場せず，この官称号が，どのような役割を担っていたのかは全く分からない。サーサーン朝には，vuzurug-framadār「大司令官」という高官が知られているが，それとバクトリア語の捺印物との関係は分からない。また，vuzurug-framadār の銘文を持つ捺印物も知られているが，図像的な考察がなされているだけである。詳細は Gyselen 2008 : 10-20 を参照。

(26)　ムグ山文書の本格的な研究は，1963年，Livshits が手紙や契約文書を，Bogoljubov と Smirnova が経済関係の文書を出版したことに始まる（SDGM II ; SDGM III）。その後，Livshits は自身の研究（SDGM II）の改訂版を出版し（Лившиц 2008），2015年には，その英訳（SECAS）が発表された（ただし，英訳に際して2008年以降に発表された研究は参照されていない）。この SECAS は，↗



ソグドの執務官も，トハーリスターンの執務官と同様，その原義から判断して，上位の者からの命令を実行，あるいは伝達していたことが想像される。実際，ムグ山文書には，ペンジケントの領主 δyw'štyc から執務官の 'wtt なる人物へ宛てた手紙が存在しており，まずはそれらから見てゆく[27]。文書 A-18 は，δyw'štyc から執務官への催促の手紙である：

↘　誤植や脱字等が訂正されないまま翻訳されており，利用の際には若干の注意が必要であるが，ムグ山文書を理解するための現時点で最重要の研究であることは間違いなく，本稿で用いる文書の理解の大部分は SECAS に基づいている。しかし一方で，ソグド語研究の進展により，現在は言語の専門家でなくとも，研究の現段階を反映した文法書や辞書を利用して文書を理解することが可能なうえ，写真版をもとに先行研究の読みを確認することも可能である。本稿では，紙幅の都合上テクストは割愛するが，古代中央アジア史に関心を寄せる研究者が，今後も SECAS を利用するであろうことを考慮に入れ，考えの異なる部分は，翻訳中にそれを註記する。註が増加し非常に読み辛くなるが，ご寛恕頂きたい。なお，ソグド語文書の理解に関しては，吉田豊先生より，細かく言及できないほど多大なご教示を賜った。衷心からの謝意を表すると共に，誤りは全て筆者の責任であることを明記しておく。なお，文書に現れる地名に関しては，Smirnova 1963 の比定に従っており，具体的な位置は地図を参照。

(27)　'wtt という人名に関しては，IPNB II/8 : no. 204 を参照。

(r1–2) ソグドの王 δyw'štyc から，執務官 'wtt へ，挨拶を。

(r2–3) 私が，誰かに「穀物を与えよ」，とお前に指示しても，お前は（穀物を）与えない。(r3–4) それならば，（与える）べきでない者に[28]，お前は与えるべし[29]。(r4–5) そちら[30]の噂によれば，お前はとても…[31] でいる。(r5–7) 私はお前に手紙を送った：「zr'w'p[32]の人々を[33]世話すべし。彼らに穀物を与えるべし。そうすれば，彼らは餓えによって不幸になることはない」と。(r7–8) 今，彼らはやって来て，次のように言った：「我々は何も得なかった」と。(r8–9) お前は今，この手紙に接したら，彼らに 200 kpc[34]の穀物を与えるべし。(v1–2) 彼らはそれを全て自分たちで分けるだろう。遅れるべからず[35]。

---

(28) この一文で，「～しなければならない」を意味する s'cy を，SECAS : 188 は s'c の 2 人称単数現在形とするが，この動詞は非人称であり，ここでは 3 人称単数希求法である（Yoshida 2009 : 312 ; cf. SD : 350a ; DMSB : 173a ; DCS : 169）。

(29) 2～4 行目にかけての文章は，δyw'štyc が皮肉を言っていると考えられている（Gershevitch apud SECAS : 112 n. 266）。

(30) SECAS : 109 は pry-（m?）yδ「こちら」，SDGM III : 69 は prynyδ「？」と読むが，SDGM II : 132 と同様に pry-tyδ「そちら」と読んだ。

(31) この語義不明の単語を，SECAS : 109 ; SDGM III : 69 は mnt"y-wzk と読むが，mnt"-y-w'k や mnt"-y-wnk とも読める。この語は，mnt-「～のない」を意味する接頭辞を含む語であり，SECAS : 112 は後半部分の "ywzk を，"ywz-/"y(')wšt「心配させる」から派生した語であると考え，この語を「安全；心配のない」と訳しているが（cf. SD : 14b, 214a），複数の読みが可能であり，語義不明のままとした。

(32) SDGM III : 108 は，ザラフシャーン（Zarafshān）のソグド語名ではないかとしているが，当否は分からない。ザラフシャーンの語源に関しては，吉田豊の説を参照（桑山 1998 : 166）。

(33) SECAS : 174 は，z-r'w'pct「zr'w'p の人々」の前に置かれた 'th を前置詞と考え，「～について，～に関して」と訳しているが，これは複数形/女性形・対格を示す冠詞である（cf. Yoshida 2009 : 291）。

(34) 穀物や液量の単位（SECAS : 50）。ムグ山文書で頻繁に見られる量詞であるが，実際の容量は判明していない。kpc については，Marshak & Raspopova 1987 : 198–199 も参照。

(35) SECAS : 110 は，裏面の 2 行を追伸と考えている。しかし実際には，表面の 10 行目は宛先であり，裏面の 2 行は，表面 9 行目から続く手紙の内容と考えられ，↗

(r10) ソグドの王 δyw'štyc から執務官 'wtt へ。(SECAS : 109–112)

この手紙が出された時点で，執務官 'wtt は δyw'štyc からの命令を実行しておらず，それに対して δyw'štyc が皮肉を述べるなど，両者を取り巻く事態は緊迫していたようである。本資料を含め，δyw'štyc が執務官へ宛てた手紙 4 点では，彼の名乗り方は，「ソグドの王」を含むものとなっている。δyw'štyc がソグドの王として即位したのは，アラブ・ムスリムの侵攻が本格化してきた 8 世紀前半，721 年であったと考えられており，ここでの δyw'štyc の名乗り方は，これらの手紙が，721 年から彼の没年（722 年）までの間に出されたことを示している[36]。

いずれにしても，この手紙から判明することは，執務官が領主の命を受けて行動する存在であったということであり，ここでは穀物の供与を命じられている[37]。さらに，δyw'štyc から執務官へ，ワインを供与するように命じた手紙（A–16）も出されている：

(1–3) ソグドの王にしてサマルカンドの領主 δyw'štyc から，執務官 'wtt へ，挨拶（と）多大なる敬意を。

(4–7) さて，お前は私の手紙に接したら，xysw のイルテベル[38]へ，若い人た

↘ ここではその順序で翻訳した。図版を見ると，9 行目の下には左から切り込みが入れられている（SECAS : 109 fig. 30）。恐らく手紙を上部から切り込みの部分まで丸め，丸めた部分に封をしたのであろう。このような手紙は他にも存在し，例えば δyw'štyc から，サマルカンドの西に位置するハーフサル（x'xsr）の領主へ宛てた手紙（B–17）も，20 行ある表面の最終行は宛先であり，表面 19 行目から裏面に手紙の内容が続いていると考えられる（SECAS : 94–99）。

(36) この頃の政治的情勢については，Grenet & de la Vaissière 2002 ; 吉田 2011：28–30 を参照。

(37) 文書 A–2，および A–3 も，同じく δyw'štyc が執務官へ穀物の供与を命じた手紙である（SECAS : 112–115）。A–3 では，δyw'štyc が執務官に対して，xwprn と xwtc'nk という人物に，A–18 と同じ量（200 kpc）の穀物を与えるように命令している。

(38) ここに見える xysw が，ペンジケントから南に山を越えた，今のドゥシャンベ↗

ちが飲むような，1（？[39]）の芳醇なワインを与えるべし。[8]遅れるべからず。[8-9]残りを封印すべし。[9-10]そして，それをとても大事に保つべし。[10-11]この手紙を証（として）保持すべし。

[11-13]時は δyw'štyc 王の 2 年，月は xwryznycy《2 番目の月》[40]，日は nγr'n-rwc《30 番目の日》であった。

[14-16]この手紙は δyw'štyc 王によって封がされ，王の命令により写しが書かれた。(SECAS : 115-118)

この手紙と直接的な関係はないが，執務官のもとでワインの徴収，分配が行われていたことを記録する文書（Б-9）も存在する[41]。ムグ山文書には，執務官から領主へ宛てた手紙が存在しないため，上述の穀物の供与を命じた手紙も含め，事の顛末は分からないが，執務官が領主からの命令を実行する役割を担っていたことは確実である。

このことは，'zr'wδk を管轄していたと思しき，'xwprn なる人物から執務官 'wtt へ宛てられた文書（Б-18）からも分かる：

[1-2]主であり偉大な希望[42]である執務官 'wtt 様へ，貴方の僕，'zr'wδk の 'rspn である 'xwprn から，［申し上げる言葉と］貴方様，偉大なる栄光へ，敬意を。

↘ 辺りにいたテュルク系民族として玄奘が伝える「奚素」に当たることは，Yoshida apud Grenet & de la Vaissière 2002 : 190 n. 77 を参照（cf. 水谷 1971：35-36）。ここに登場するイルテベルについては，後掲註(64)を参照。

(39) ここでは液量の単位が記されていない。

(40) ソグドの暦に関しては，《　》で何番目の月日に当たるかを示す。

(41) SDGM III : 32-34。SDGM III に掲載されている経済関係の文書に関しては，近い将来 Alisher Begmatov 氏が総合的研究を発表する予定であり，詳細はそちらを参照されたい。

(42) SECAS は，ここで「希望」と訳した 'nwth という語を，一貫して「支え (support)」と訳しているが（cf. SECAS : 173），この語は，現在では「希望」という意味であると考えられている（cf. DMSB : 13a ; DCS : 39）。

(2)領主は次のようにお命じになられた[43]：「私は執務官に命じるだろう。そうすれば … (3)彼は 2 つの pyδmz[44]を作るだろう。私は pyδmz k'cnt も，首飾りも，ロープも送るだろう。5 つの … も［送る］だろう。(4)執務官は kwδ'rtcynw を派遣するだろう。お前たちは穀物を手に入れるだろう。私は盾を送るだろう」。… (5)こちらの命令に関しては，何もなされませんでした。今，そのゆえに，私は貴方に申し上げる言葉を送りました。… (6) … もたらされました。何の助けにもならないでしょう。

ここで重要なのは，2 行目に見える「私」が誰を指すかである。SECAS : 134 は，この「私」を，手紙の差出人 'xwprn と考えている。しかし，この文章は領主の命令を直接引用した部分であり，筆者はこの「私」が領主を指していると考えている。つまり，領主が執務官へ命令していることを示す文章と考えられるのである。

執務官は，上述の穀物やワイン以外にも，皮革類の徴収，分配を行なっていたことも知られている。まずは執務官から出された受領証（B-3）を見てみよう：

(1-3)ペンジケントの領主 δyw'štyc の 11 年，月は RBk xntyc《6 番目の月》，日は xwrrwc《11 番目の日》であった。
(4-6)執務官の 'wtt から，mrtšk における貯水池の長[45]wxšmryk へ。(6-9)私は mrtšk における貯水池の長である汝 wxšmryk から受け取った。(9)… 厳選された（？）皮と … (10)… 4 枚の野生動物の（毛皮？）(11-13) —— そのうち，1 枚は染めた革，3 枚は巻かれた皮 —— を，(13-15)13 枚のキツネの毛

(43) 以下，領主の命令の内容が続くと思われるが，その内容がどこまで続くか正確には分からない。以下の文章では，未来形の動詞が続いており，それは 4 行目の終わりまで続く。よって，ここでは領主の命令がそこまで続いていると判断した。
(44) SECAS : 135 は，Б-3, Б-12 で，pyδmz wyt'k（wyt'k は「ロープ」の意味）と現れることから，紐やロープの類を指す語と推測している（cf. IPNB II/8 : no. 974）。
(45) "w'zy-(pt)「貯水池の長」を，SDGM III : 61 は，"w'rkpt「会計長」とするが，ここでは SECAS : 56 の読みと解釈に従う。

皮（？）[46]，また 4 枚のキツネの …（SECAS : 56–60）

この手紙は，δyw'štyc がまだ「ソグドの王」を名乗る以前のものである。ここでは，執務官が wxšmryk なる人物から皮革を受け取ったことが記されている。さらに，この翌月に書かれた文書（A–10）では，wxšmryk が別の人物から毛皮を受け取っていたことが記されている：

(1–4) 私 wxšmryk は，knc'k[47] から 10 枚の山羊の（毛皮），5 枚の牛の大小の毛皮，そして 1 枚のロバの毛皮を受け取った。(5) 2 枚の同じ文書（がある）。(6–7) それらのうち[48]，1 枚は wxšmryk が保持し，1 枚は knc'k（が保持する）。(8–9) 領主 δyw'štyc の 11 年，月は βγk'nyc《7 番目の月》であった。(10–11) この同等の（文書）は 'wtt 自身（のものである）。（SECAS : 60–61）

Livshits が述べるように，この文書からは，物資のやり取りがあった場合に受領証を 2 通作成し，送り手側と受け取り手側がそれぞれ 1 枚ずつ保持することになっていたことが分かる[49]。さらに，当文書の末文で示されているように，執務官が直接関わっていないやり取りの場合にも，その際に作成された受領証

---

(46) rzγ「毛皮？」を，SECAS : 57 は r'γ/r'x と読み，意味は不明とする（SECAS : 60）。一方，SDGM III : 63 は，rzγ が「羊毛，毛皮」を意味する rγz から来ていると考え，タジク語の ragza「毛織物」やヤグノーブ語の ragza「ズボン」と比較している。また，rnγ と読む可能性も指摘し，ペルシア語の raghnīn「ズボン」と比較している。ここでは文脈から SDGM III の解釈に従った。

(47) この人名に対しては様々な読みが提示されており，実際に複数の読みが可能であるが（SECAS : 61 ; SDGM III : 57, 95），ここではひとまず，最新の研究である IPNB II/8 : no. 537 に従っている。

(48) ここで「それらのうち」と訳したのは，前置詞 MN（cnn）である。この前置詞はもともと指示詞を含んだものであり，時折その機能を保持している場合があり，ここではそれに当たると解釈できる（cf. DMSB : 64a）。SECAS : 61 はこの語を翻訳していないが，SDGM III : 57 は正しく翻訳している。

(49) SECAS : 111。wxšmryk が knc'k とは別の人物から皮革を受け取り，2 枚の受領書を別々に持つことを記した文書（B–5）も存在する（SDGM III : 58–59 ; SECAS : 51）。

と同等の内容が記された文書が執務官 'wtt のもとに残されることになっており，執務官は，相当細かに物資のやり取りを管理していたと考えられる[50]。

次に，執務官よりも下位にあった人物たちが執務官へ宛てた手紙に注目したい。まずは，A-6 の文書から見てゆきたい：

> [1-3]主である執務官 'wtt 様へ，貴方の僕 xmyr[51]から，申し上げる言葉と貴方様への多大なる敬意を。

---

(50) wxšmryk なる人物に関しては，上掲の文書以外にも，'kwzyr なる人物から，複数回にわたって皮革を受け取っていたことを記す文書（A-4），さらに，執務官 'wtt から 43 枚の皮革を受け取ったことを記す文書（A-8）が存在する（SDGM III : 60-62 ; cf. Gershevitch 1975）。つまり，wxšmryk が登場する文書は，全て皮革に関連するものであり，この人物が皮革のやりとりを担当する中心人物であったことは明らかである。上掲 B-3 では，wxšmryk が「貯水池の長（"w'zypt）」と呼ばれており，ここで言う「貯水池」とは，皮革を鞣すための施設であったのかもしれない。また，革製品の工房における記録と思われる文書（Nov. 1）には，'wtt が革の胸当てなどを受け取っていたことも記されているが，ここで 'wtt に革製品を渡している 1 人称単数の「私」は，wxšmryk かもしれない（SDGM III : 37-41）。この人物に関してさらに興味深いのは，「オクサスのしもべ」を意味するこの人名が，バクトリア語からの借用であるという点である（IPBN II/7 : no. 324 ; IPNB II/8 : no. 1356）。この人物の祖先がトハーリスターンからソグドにやって来たのか，あるいは当人がやって来たのかは分からない。キダーラ，およびエフタルの時代にトハーリスターンとソグドが，これらの勢力の領域内に組み込まれたことが知られているが（Grenet 2002），これらの時代に両地域間でどれほどの規模の人的交流があったのかは分からない。一方で，土器組成の研究によれば，北部トハーリスターン（アム・ダリアの北側）で，ソグドに由来する器物が出土し始めるのは，エフタルの勢力が崩壊した後，7 世紀以降の層からである（岩井 2004 : 6-12）。また，バクトリア語文書の中で，ソグド人集落（βονοσογολιγο）に言及する文書（Doc. S）が，693 年の紀年を持っていることを併せて考慮すれば（BD I^2 : 94-97 ; cf. IPNB II : no. 249），7 世紀頃から両地域間で人の往き来が活発になったと考えられ，wxšmryk はトハーリスターンからソグドにやって来てそれほど世代の経過していない人物であった可能性がある。

(51) この人物は，前註で言及した Nov. 1 にも登場し，xmyr という人名はホラーサーンのアミールにちなんで名付けられたものと考えられている（IPNB II/8 : no. 1407）。この人名も含め，ソグド語資料に見えるアラビア語の要素については，Lurje 2008 を参照。

(4-5)貴方様よ，彼[52]はそちらに人々を送りました。(5-6)貴方様よ，領主は食糧[53]を与えるように命令されました。(6-10)貴方様よ，私は次のように申し上げます：すなわち，人々に，「私は貴方に相応しく，（貴方からの）希望を持っている」とお認め下さい。

(11-12)主たる執務官 'wtt 様へ，僕たる xmyr から。(SECAS : 118-119)

6～10 行目に見える「人々に，「私は貴方に相応しく，（貴方からの）希望を持っている」とお認め下さい（ZKwh mrtxmkt w'nkw prm'y 'nz-'n't c'nkw ZY 'zw tw' 'y-zn 'ym ZY 'nwth βr'm）」という一文は，xmyr が 'wtt から信任を得ていることを人々に示して下さい，という意味であり，この手紙は，人々が xmyr の言うことを聞かないため，執務官 'wtt へ訴えた手紙と考えられる。

この手紙で重要なのは，xmyr が手紙の中で領主からの命令に言及していることである。以下に提示する他の文書も同様に，部下から執務官への手紙には，領主からの命令についての頻繁な言及が見られる。Livshits が述べる通り，これは，執務官がペンジケントの外で活動していたことを示していると考えられる（SECAS : 111-112）。そして，xmyr は領主の命令を執務官に伝えるため領主から派遣された，あるいは領主と連絡を取るために執務官から派遣された人物と考えられる。この点に関しては，xmyr が執務官に対して敬語を用いている点も重要である[54]。これは，xmyr と執務官との間には確実な身分の差があり，執務官は自分よりも下位の人間を使役できる存在であった可能性を示している。

---

(52) SDGM III : 75 は，この彼が誰であるかは明らかでないとして，手紙の差出人の xmyr を指す可能性も考慮に入れているが，手紙の差出人であれば，1 人称単数形を用いるのが自然であると考えられる。ここでは，この「彼」が，次の文に登場する領主，すなわち δyw'štyc を指すという SECAS : 119 の考えに従っている。

(53) SECAS : 119 はこの語を rwtc'k（w）と読むが，SDGM III : 74 と同じく，rwtcyk（w）と読む。この語については，SD : 344b ; DMSB : 169b を参照。

(54) 手紙に散見される-βγ「貴方様よ」という言葉は，相手への敬意を表している。また，6～10 行目の ptškwy'm「私は～申し上げます」，および prm'y 'nz-'n't「お認め下さい」も敬語表現である。ソグド語における敬語表現については，吉田 2006 を参照。

前掲Б-18（4行目）でも，執務官が人を派遣することが記されていた。

次に，'šp'δkk/'sp'δk なる人物から執務官 'wtt に宛てられた手紙を検討する。まずは，Б-13 から見てゆこう：

(1)主であり偉大な希望である執務官 'wtt 様へ，貴方の僕 'šp'δkk[55]から，申し上げる言葉と多大なる敬意を。

(2)貴方様よ，彼が貴方のところから出発した時[56]，貴方様よ，彼は南[57]の 'xsyknδh にやって来ました。(2-3)彼が貴方のところから取ったこの衣類を，彼は全て領主に渡しました。貴方様よ，領主は次のようにおっしゃった：「最初の[58]使者たちはすでに別の方へ[59]行ってしまった」と。(3-4)もし私が

---

(55) SECAS : 125 に掲載された図版では確認できないが，写真版を見ると，SECAS : 124 や IPNB II/8 : no. 158 が採用する 'sp'δkk ではなく，'šp'δkk と記されているように見える（SDGM Φ : pl. XXXIX）。この人物は後に見るБ-11，およびБ-15 の差出人 'sp'δkk と同一人物であると考えられ，ここでの表記は単なる誤記かもしれない。

(56) wytr「出発した」は三人称単数未完了形であり，主語の「彼」が誰に当たるかは問題である。SECAS : 124 は，この主語が，自らのことを「貴方の僕」と呼ぶ，手紙の差出人 'špδ'kk を指すと考えている。この考えを否定する積極的な根拠はないが，筆者は，3行目に登場する「使者たち（'zγ'ntt）」がこの一文の主語となる可能性も想定している。「使者たち」は複数形であるので，動詞も3人称複数形であることが期待され，この一文の主語としては相応しくないように見える。しかし，当該の「使者たち」を主語とする一文の動詞（xrtkt 'sty）は，過去分詞と助動詞からなる完了形であるが，その助動詞は単数形になっており，筆者の推測もあながち不可能ではないかもしれない。先に見たA-6（4〜5行目）に見える「彼」の事例も参照（註(52)）。

(57) ここで「南」と訳した nymyδ を，SECAS : 125 は「日中」と訳しているが，この語には「南」という意味も存在し（SD : 251b ; DMSB : 130b），ここでは地名が続くことを考慮し，方角を採用した。

(58) ここで「最初の」と訳した語は 'βtmy である（SECAS : 124 ; SDGM III : 80）。ただし，この一文は領主が話した内容に当たり，この部分には，直接引用を示す ZY が現れることが期待され，'βtmy は ZYtmy と読むことも可能である。その場合，-my は人称代名詞1人称単数接尾辞形であり，「私の使者たちは」という意味になる可能性がある。ただし，-t-は説明できない。

(59) 「別の方へ」と訳した p'rs'r を，SECAS : 124 は，pts'r「そこで，その後」を参↗

道中で使者たちに会ったら，私は再び帰ってくるでしょう。私たちは自らこちらで pxštkt[60]を手に入れます。(4-5)領主は 'sk'tryh（の取り分[61]）から，イルテベル（に）半分を与えました。彼（イルテベル）に果物の半分を与えました。(5-7)貴方様よ，貴方は，果物（を与える）以外に，何もしてはならず，これ以上何も与えてはいけません。なぜなら，領主は彼への供給を妨げるよう命じたからです[62]。(7-8)彼（領主）は私に，ここでイルテベルに 200 kpc の穀物を与えるように命じ，彼（イルテベル）に 50（頭）の羊を（与えるように）命じました。(8)kwm に羊がおり[63]，彼（領主）はそれらを（与えるように）命じました。(SECAS : 124-126)

↘ 考にして，「最近，ちょうど（？）」と意味を推測しているが，ここでは主語である「使者たち」が向かった方角を示していると考えた（DMSB : 133a）。ただし，この語は prns'r とも読め，その場合は「貴方様へ（< 栄光へ）」といった意味になるが，敬語として prn が用いられる場合は，人称代名詞と共に用いられるため，ここではその事例に当たらないと考えた（cf. 吉田 2006 : 87-88 ; DMSB : 81a）。

⑹ SECAS : 124 は，この語を「手紙」と訳しているが，その根拠が示されていない。SDGM III : 81 と同じく，pxštk「描かれた」（cf. SD : 275a）を参考にしていると推測されるが，ムグ山文書には，手紙を意味する n'm'k/m'mk や pwstk という別の言葉が存在するため，ここでは語義不明の単語として扱った。

⑹ ここでの意味の補いは，SECAS : 124 に従っている。

⑹ この一文に見える pcxwsty は pcxw'y/pcxwst-「妨げる」の過去不定詞である（SECAS : 126 ; cf. SD : 269b ; DMSB : 136a）。SDGM III : 80 は，この語を pcγwsty と読み，pcγwδ-（?）「隠す」なる動詞の不定詞だとする（SDGM III : 125）。筆者にはこの動詞を，辞書中に見出すことができなかったが，pγwž/pγwšt-「隠す」という動詞は知られている（SD : 275 ; DMSB : 138a ; DCS : 135）。また，ここで「供給」と訳している 'zβ'r という語は，'nβ'r と読むことも可能であり（SDGM III : 80-81），P. Lurje は，バクトリア語の αμβαρο「倉庫」と比較し，この意味で考えているが（Lurje 2010 : 782 n. 6），これには異論がある（DMSB : 9b）。筆者にはこの当否を判断できないが，ここでは，「供給」とする SECAS : 126 の考えが，動詞の意味も踏まえ，文脈に合うと判断した。

⑹ SECAS : 126 ; SDGM III : 81 は，ここで地名 kwm-と関係すると考えた kwmy を，関係代名詞 kw に，1 人称単数人称代名詞接尾辞形の-my が付された形と考えているが，人称代名詞の接尾辞形はこの位置には置かれ得ず，文の始まりを示す rty の後に付されるため，この解釈は不可能である。また，'stwrt「羊」を，SECAS : 124 は 'stwryh と読むが，SDGM III : 80 に従った。

先の xmyr 同様，'šp'δkk も領主からの命令に言及しており，執務官と領主との間で活動していたことが見て取れる。また，イルテベルについての言及は，'sp'δkk から 'wtt への別の手紙（Б-15）にも見え，Б-13 との前後関係は分からないが，そこでも 'sp'δkk が，イルテベルに対して果物以外のものを与えないよう 'wtt へ伝えている[64]。またБ-15 では，'sp'δkk が領主の命令に従い，執務官に対して羊を要求しているにも関わらず，羊を得ることができなかったと訴えている。羊に関する言及は，'sp'δkk が 'wtt へ宛てた別の手紙（Б-11）にも見える：

> (1-2)主であり偉大な希望である執務官 'wtt 様へ，貴方の僕 'spδ'kk から，申し上げる言葉と多大なる敬意を。
> 貴方様よ，彼らはそちらに，'zr'wδkh から，'sk'tryh から，そして 'nš'kh（？）[65] から穀物を運びました。(2-3)貴方はそれらを全て[66]書き，それをこちらへ送るべきです。貴方様よ，そちらで，私の人々を留めないで下さい[67]。(3-4)なぜなら，彼らはこちらへ出発するからです。そちらで穀物を取った人々に関して，我々は彼らの名前を全て書きました。貴方は彼らを調査すべきです[68]。また，彼らの名前を全て書き，それをお送り下さ

---

(64) SECAS : 129-131。ここに登場するイルテベルは，上掲 A-16 に登場した xysw（奚素）のイルテベルと同一人物である可能性がある（cf. IPNB II/8 : 336）。Б-13 に見える 200 kpc の穀物に対する言及も，A-16 との関係を示唆する。また，イルテベルは，ワインと小麦の支出簿であるБ-2 にも登場しており（SDGM III : 29-31），一連の文書は，アラブ軍と戦う δyw'štyc の援軍としてやって来ていたイルテベルに供給された物資に関わるものであったと考えられる。

(65) SECAS : 126 n. 325 ; SDGM III : 81 が示す通り，"š'kh, 'nšnkh, 'zγnkh などの読みが可能である。

(66) SECAS : 126 のテクストでは，s'tw「全て」が落ちている（cf. SDGM II : 147）。

(67) この一文に見える「遅れ，停止」を意味する名詞を，SECAS : 127 は wyz'w と読み，SDGM III : 81 は wrz'w と読む可能性も提示するが，wyn'w と読むのが正しいようである（Sims-Williams 2015 : 8 ; cf. DCS : 213）。

(68) SECAS : 128 は，この一文に見える "ms'k を，「リスト，記録」を意味すると考え，「貴方は彼らのリストを作るべきです」と訳している（SECAS : 127）。しかし，こ↗

い[69]。(5-6)なぜなら，領主は今，調査するように命じているからです。貴方様よ，さらに，羊について[70]，… について，調査すべきです。（そして）全てを書き，それをこちらに送るべきです。(6-7)もし，それが与えられないなら（？）[71]，我々はさらにそれらを要求します。私は 'zr'wδkh からそちらに，63 頭の羊を，'št'tc の手で送りました。(7-8)そちらに到着する物は，貴方はそれを，正しく，大いに調査すべきです。そちらに，私自身の（受け取るべき？）文書[72]が（あります）。貴方はそれをこちら，下流の wš"k-stn'k（？）と βw'y（？）[73] に送るべきです。(8-9)何であれ文書があるなら，それらを半分にして，それらをこちらへ送るべきです。nγnp"k[74]のもとに使者が来ました。領主がそちらへ出発しないので，nγnpk がそちらへ行

↘ の語は「調査，注目」などの意味であり，動詞 kwn-と共に，「調査する，注意を払う」の意味で用いられる（cf. DMSB : 9a ; DCS : 27）。

⑹ この一文では「命令する」を意味する動詞 prm'y と不定詞を組み合わせた敬語が用いられている（cf. 吉田 2006 : 82-83）。註⑸も参照。

⑺ SECAS : 127 のテクストでは，'stwryh「羊」，およびそれに続く前置詞 prw が落ちている（cf. SDGM II : 147）。

⑻ kδ L' δr'βt β't「もしそれが与えられないなら」の δr'βt は，SECAS : 127 ; SDGM III : 81 が提案する読みであり，通常 δβ'rt と記される δβr-「与える」の過去語幹が，このように書かれていると推測している。しかし，語頭の δ-は，SDGM II : 149 が述べるように，先行する L' を再び書こうとした書き誤りであるように見える。語頭の文字は，β-にも見え，そうであるなら，SDGM II : 149 が言及する，βr'yt が最も近いように見える。これを βyr「手に入れる，獲得する」の過去語幹 βy'rt の書き誤りと考えることも可能かもしれない。そうであれば，「もしそれが手に入れられないなら」という意味になる。

⑼ SECAS : 128 は，pwstk を「皮革」と訳しているが，この語は普通「手紙，文書」などを意味し，SECAS でも当該文書以外では全てそのように翻訳されている（cf. SECAS : 187 ; cf. SDGM III : 82）。ここでは，一般的な意味を採用した。

⑽ SECAS : 127 は β（w?'y）と読み，SDGM III : 82 は yncy/β'cy と読む。筆者にはいずれの読みの当否も判断できないため，ここでは SECAS に従う。語頭の β-と語末の-y は確実なように見える。

⑾ SECAS : 127 は nš'p'k と読み，語源や意味は不明であるとしており（SECAS : 129），ここでは，語源が提案されている SDGM III : 82 の読みに従った（cf. IPNB II/7 : no. 775）

くことができません。(9–10)β'nprn は彼（領主）のもとから，そちらへ出発しました。私は 1 β'r[75] の小麦粉を送りました。さらに必要なものは，お知らせ下さい。

執務官が領主から穀物の供与を命じられていたことはすでに述べたが，手紙の前半部分では，具体的に複数の土地から執務官のもとへ穀物が運ばれていたことが記されている。そして 'spδ'kk は，穀物を運んだ人々の名前（おそらくは運ばれた穀物の量も）を記録して自分の元へ送るように執務官へ要求しており，人名録を送ることで，物資を受領したことの証にしていたのかもしれない。すでに見た皮革類の受領証では，2 通の受領証を作成し，送り手と受け手がそれぞれに保持することが記されていたが，当該文書の 8〜9 行目に見える，「何であれ文書があるなら，それらを半分にして，それをこちらへ送るべきです」という文章は，受領証の片割れを送るように要求していると考えることができる。

また先に少しく述べたように，この手紙からは，執務官が家畜も管理していたことが分かるが，先述した Б–15 や，この Б–11，さらには本章冒頭で提示した A–18 の内容から考えると，アラブとの戦いの最中であったからか，物資のやり取りや連絡が円滑に行われていなかったように見える[76]。

執務官に関連する文書として，最後に Б–4 を見ておきたい：

(1–2)RBk xntyc 月《6 番目の月》，r'm 日《21 番目の日》（であった）。

⑺⑸ 「積荷，荷物」という意味の名詞（SD : 97b ; DMSB : 49b）。バクトリア語にも βαρο という語が見られる（BD II : 202a）。

⑺⑹ Livshits は，手紙の断片 Б–19 も，上述した Б–11, 13, 15 と筆跡が似ているとして，'šp'δkk/'sp'δkk からの手紙と推測しており，領主からの命令や，地名 'zr'wδkh に言及していることから，その推測は正しいと考えられる（SECAS : 131–133）。なお，'wtt への手紙としては，A–1 も存在するが，手紙に言及されている物資が具体的に何を指しているのかを理解することが困難なため，ここでは考察から除外した（cf. SECAS : 120–124）。ただし，この A–1 に言及されている幾つかの物資については新たな解釈の可能性が提示される予定であり，詳細は Begmatov forthcoming を参照。

私 'cp'δ'k は執務官 'wtt から，'ywšyšth で，3 枚の木綿[77]と 4 つの帽子を得た。(2-5)そして，twn が 1 つの帽子を与えた。(3-4)'xšywnc が 1 つ（の帽子を与えた）。執務官が 1 つの帽子（を与えた？）。（1 つの帽子から？）cp'δth（？）が作られた[78]。yδkw[79]が 1 枚の木綿（から）上着を作った。(4-5)m'xy'kc が 1 枚の木綿を与えた。nwch が 1 枚の木綿を与えた。（SECAS : 165）

ここで問題となるのは，文書中に 2 度登場する執務官である。冒頭では，'cp'δ'k が執務官 'wtt から 3 枚の木綿と 4 つの帽子を受け取ったことが記されている。それ以降の文章は，短い文章の羅列で解釈が非常に難しいが，主に，それらの物資を別の人々が誰かに分配しているように見える。そうであるならば，冒頭の執務官 'wtt と 2 度目に言及される執務官が別の人物である可能性がある。もちろん，ムグ山文書中には，'wtt 以外に執務官の名前は知られていないため，筆者の考えは推測の域を出るものではないが，1 つの可能性として提示しておきたい。

Ⅲ　φρομαλαρο と prm'nδ'r

さて，トハーリスターンとソグドの執務官について，これまでの考察で判明したことをまとめると，次の表のようになる（◯は資料から確実に言える，× は資料からは判明しない，△は可能性のあることを示す）：

---

(77)　wšwy-n'k「木綿」を，SECAS : 165 は wγwy-'nkw と読み，SDGM III : 65 は wšwy'nk と読むが，Sims-Williams & Hamilton 2015 : 68 に従う。

(78)　SECAS : 165 が，'-yw sr'kh prm'nδ'r cp'δth βyr'「執務官が 1 つの帽子を cp'δth から得た」とするところを，筆者は '-yw sr'kh prm'nδ'r cp'δth kyr'「執務官が 1 つの帽子（を与えた？）。（1 つの帽子から？）cp'δth（？）が作られた」と考えた。prm'nδ'r と cp'δth との間で文章が切れる可能性は，SDGM III : 65 でも提案されている。また，IPNB II/8 : 164 は，cp'δth を人名とみなすのは難しいと考えている。

(79)　IPNB II/8 : no. 57 は '-δkw と読むが，Yoshida 2012 : 204a と同じく，SECAS : 165 の y-δkw を採用した。

	1. 在地支配者の命令の傳達・實行	2. 税の徴收	3. 物資・家畜の管理	4. 下位の人間を使役	5. 複數人數の存在
トハーリスターン	○	○	×	△	△
ソグド	○	×	○	○	△

1. は両地域に共通している点であるが，これは「命令を持つ者」という原義から容易に想像できる点であり，ある意味当然の共通事項と言える。ただし，ここで注意しなければならないのが，在地支配者と執務官との間の身分の差である。

バクトリア語には，ソグド語と同じく，「命令する」を意味する動詞 φρομιι- の命令形と不定詞を組み合わせた敬語表現が存在する（BD II : 276a）。執務官が khār に宛てた手紙は本稿で扱った 1 点しか存在しないため，必ずそうであったとは断言できないが，執務官から khār への手紙には敬語が用いられていない。また，吉田豊の研究によれば，バクトリア語の手紙の書式では，通常，受取人，差出人の順に名前が記されるが，差出人の地位が特別に高い場合，差出人の名前が先に記され，そのような事例は，クシャノ・サーサーンの王（あるいはその一族の者）が出した手紙，および，サーサーン朝による強い影響の下，ローブの北東に位置するバグラーン・ゴーリー平原に 4 世紀後半頃出現したカダグスターンと呼ばれる地域の支配者 kadag-bid が出した手紙だけである[80]。つまり，khār と執務官との間に確実な身分の上下が存在したとは言えないのである。

ソグドの場合，執務官が領主に宛てた手紙が存在しないため，状況は分からないが，この点に関しては，δyw'štyc が受取人の手紙と，執務官が受取人の手紙とに，同じ挨拶文句が見えることが Livshits によって指摘されており，参考になる（SECAS : 111）。すなわち，手紙を送る側からは，領主も執務官も同様の扱いになっていたということであり，上述のトハーリスターンの状況と併せれば，両地域では在地の支配者が絶対的に高い地位にあった訳ではなかっ

(80) 吉田 2013 : 58-59。カダグスターンについては，EIr : KADAGISTĀN ; 宮本 2014 : 85-111 を参照。

たと考えられる。さらに想像すれば，執務官が khār や領主に近い地位を有し，その代理人のような立場で活動していた可能性も考え得るかもしれない。

2. の徴税に関しては，そもそも両地域の租税体系が全く判明していないため，これ以上の考察は難しい。本稿で見たバクトリア語の手紙（Doc. jh）では，差出人が受取人に対して，税として羊を渡して下さいと要請していること，および差出人が執務官に黄金を支払うということが記されていたが，この文書を除けば，Doc. je に税についての言及が見られるだけであり，そこではロバと牛が税として言及されている[81]。ソグドに関しては，筆者は既存の辞書に「税」を意味する言葉を見いだすことができず，わずかにキリスト教ソグド語に bwžbr「徴税人」という語が存在することを知り得ただけであった（SD : 116a ; DCS : 57）。

前章で見たように，3. に関しては，ソグドには豊富な事例が存在するが，現在のところ，このような職掌をトハーリスターンの執務官が有していたことは知られていない。ムグ山文書と同様，バクトリア語文書中にも，金貨や物資の受領証が存在している[82]。金品のやり取りを執務官が管理していた可能性も皆無ではないと思われるが，受領証には執務官の存在は言及されていない。むしろ，受領証が全て，「これはお前の（受領）証（である）」という文言で終わり，バクトリア語文書には，この文言中に見える σιργο「証」と同じ要素を持つ，σιρολαρο「記録官」という官称号が，たった 1 度とはいえ在証されていることから考えれば，トハーリスターンでは執務官以外の人間を想定した方が良いかもしれない（BD II : 264）。

---

(81) BD II : 130–131。バクトリア語文書中には，τωγο/τωγγο「税」への言及が他にも幾度か見られるが，それらは ηβοδαλαγγο τωγο「エフタルの税」や χαγαναγγο τωγο「khagan の税」など，外来の支配勢力に対して支払われた税についての言及である（cf. BD II : 270b）。

(82) Docs. Aa, B, E, G, H（BD I^2 : 30–31, 36–37, 42–43）。Sims-Williams は，Doc. M も受領証とするが（BD I^2 : 13），この文書には，他の受領証に見える共通の文言が現れないため，ここでは考察の対象から除外した（BD I^2 : 66–67）。Doc. M は借金の返済について記す文書であり，物資などの受領の場合とは異なる扱いであったのかもしれない。

ただし，ここで注意しなければならないのは，2. と 3. の区別である。トハーリスターンで税として徴収されていたのは，現在分かる範囲では，黄金，羊，ロバ，牛であった。また先に言及した受領証の１つには「金貨」の受領証が存在し，貨幣も税として徴収されていたかもしれない。一方ソグドでは，何が税として徴収されていたのかすら判明していないが，執務官のもとへ穀物や家畜が集められていたことはすでに見た通りであり，これを一種の徴税と考えることもできるかもしれない。もしそうであれば，両地域の執務官は結果的に同様の職掌を担っていたと言える。

4. について，トハーリスターンの事例は，Doc. jh に言及されていた，執務官のもとから人が派遣されたという１例のみであり，派遣された人間と執務官との身分の上下関係を知るための敬語用法といった手がかりは存在しない。一方ソグドでは，執務官と物資のやり取りを行なっていた人物たちは，執務官に対して敬語を用いており，両者の間には明らかな身分の差があった。

最後に，5. に関して，バクトリア語文書では，執務官が３つの異なる地名と共に言及される事例が存在した。Ⅰ章で述べた通り，これらの執務官が同時に存在したことを証明することはできないが，地名と共に言及されるという事実を重く見れば，その可能性は捨てきれない。またソグドでは，前章の最後に挙げたБ-4 の解釈によっては，複数の執務官の存在を想定できるかもしれず，両地域の執務官に共通する点であった可能性がある[83]。

---

(83) この問題に関連して，執務官の居所に関する諸説に触れておきたい。SECAS : 111-112 は，その名称の類似から，その１つが，現在の Filmondor（19 世紀までは Falmāndār と呼ばれていた）という村の辺りにあったのではないかと推測している。また近年，ペンジケントの東に位置するサンジャル・シャー遺跡のザラフシャーン川流域における位置づけが，同遺跡で発見されたアラビア語文書に関する研究の中で議論され，創建が５世紀にさかのぼると考えられているこの遺跡が，執務官の居所であったとする考えが提示された（Haim, Shenkar & Kurbanov 2016 : 144-146）。他にもクム Kum の城跡をその所在地とする考えもあるようである（ibid. : 145）。

お わ り に

以上，トハーリスターンとソグドの執務官それぞれに関わる文書を詳細に検討し，最後にそこから判明した点を比較した。その結果，両地域の執務官には，多くの共通点があることが明らかになった。むしろ，Ⅲ章で比較検討した，2. と 3. の事項を 1 つの枠組みで捉えるなら，資料から導き出される全ての事項が共通しているとも言える。徴税や物資，家畜などの管理といった具体的な職掌が共通しているとすれば，本稿で導き出された結論は，他地域の類似の官称号，とりわけトハーリスターンにも一時期強大な影響力を及ぼしたサーサーン朝の plm'tʼl の職掌を考える上でも重要であると思われる。

本稿は，両地域の社会階層を構成する一部のみを扱った研究であり，そこから導き出された成果が，謎の多い古代中央アジアの政治史，とりわけ近年改めて関心の高まっている中央アジアに到来したキダーラやエフタルの歴史の解明に直接的に寄与する訳ではない。しかし，冒頭に述べた通り，筆者はこのような地道な研究を積み重ね，これら諸勢力が支配した地域の社会の実情を明らかにしていくことが，最終的に政治史的な問題の解明に繋がっていくと考えている。

今後は，バクトリア語やソグド語と同じ中期イラン語の東方言が使用されたコータンや，クシャーン朝支配の影響を残すニヤに，トハーリスターンとソグドの執務官と同様の役割を果たした官称号を探ると共に，他の社会階層の解明をも進め，古代中央アジアの社会の様相を可能な限り明らかにし，それを政治史の解明へと結びつけてゆきたい。

［付記］校正段階になって，吉田豊「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57，2018，155-182 が発表されていることを知った。本論で言及しているムグ山文書 A-16 については同稿の pp. 173-174 を参照。本稿は科学研究費（16J05995）の成果の一部である。

略号・参考文献

BD I[2] : Sims-Williams 2012a
BD II : Sims-Williams 2007
BD III : Sims-Williams 2012b
DCS : Sims-Williams 2016
DMSB : Sims-Williams & Durkin-Meisterernst 2012
EIr : *Encyclopædia Iranica*
IPNB II/7 : Sims-Williams 2010
IPNB II/8 : Lurje 2010a
SD : Gharib 2004
SDGM II : Лившиц 1963
SDGM III : Боголюбов & Смирнов а 1963
SDGM Φ : Орбели 1963
SECAS : Livshits 2015

Begmatov, A. (forthcoming) "Commodity Terms in the Languages of Central Eurasia : New Interpretations from Mugh Document A-1", *Studia Iranica*.

Боголюбов, М. Н. & О. И. Смирнов а (1963) Хозяйственные документы. Согдийские документы с горы Муг, вып. 3, Москва.

Burrow, T. (1937) *The language of the Kharoṣṭi documents from Chinese Turkestan*, Cambridge.

Gershevitch, I. (1975) "Sogdians on a flogplain", in *Mélanges linguistiques offerts à Émile Benveniste*, Louvain, 195-211.

Gharib, B. (2004) *Sogdian Dictionary : Sogdian-Persian-English*, Tehran.

Grenet, F. (2002) "Regional interaction in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hephthalite periods", in : Sims-Williams, N (ed.) *Indo-Iranian Languages and Peoples*, Oxford, 203-224.

Grenet, F. & É de la Vaissière (2002) "The last days of Panjikent", *Silk Road Art and Archaeology* 8, 155-196.

Gyselen, R. (1989) *La géographie administrative de l'empire sassanides. Les témoignages sigillographiques*, Paris.

Gyselen, R. (2002) *Nouveaux matériaux pour la géographie historique de l'empire Sassanide : sceaux administratifs de la collection Ahmad Saeedi*, Paris.

Gyselen, R. (2003) "La reconquête de l'est iranien par l'empire sassanide au VIe s. d'après les sources « iraniennes »", *Arts Asiatique* 58, 162-167.

Gyselen, R. (2007) *Sasanian Seals and Sealings in the A. Saeedi Collection*, Leuven.

Gyselen, R. (2008) *Great-Commander (vuzurg-framadār) and Court Counsellor (dar-andarzbed) in the Sasanian Empire (224–651) : The Sigillographic Evidence*, Roma.

Haim, O., M. Shenkar & Sh. Kurbanov (2016) "The earliest Arabic documents written on paper : three letters from Sanjar-Shah (Tajikistan)", *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 43, 141–189.

Khan, G. (2007) *Arabic Documents from early Islamic Khurasan*, London.

Lee, J. & N. Sims-Williams (2003) "The antiquities and inscription of Tang-i Safedak", *Silk Road Art and Archaeology* 9, 159–184.

Лившиц, В. А. (1963) *Юридические документы и письма*. Согдийские документы с горы Муг, вып. 2, Москва.

Лившиц, В. А. (2008) *Согдийская эпиграфика Средней Азии и Семиречья*, Санкт- Петербург.

Livshits, V. A. (2015) *Sogdian epigraphy of Central Asia and Semirech'e*. London.

Lurje, P. (2008) "Khamir and other Arabic words in Sogdian Texts", in : É de la Vaissière ed. *Islamisation de l'Asie centrale. Processus locaux d'acculturation du VIIe au XIe ciècle*, Paris, 28–57.

Lurje, P. (2010a) *Personal Names in Sogdian Texts*, Iranisches Personennamenbuch II/8, Wien.

Lurje, P. (2010b) "Review : Durkin-Meisterernst, D. et al. eds. *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mitteliranischer Zeit*", *Orientalistische Literaturzeitung* 105/6, 778–784.

Marshak, B. & V. Raspopova (1987) "Une image sogdienne du dieu-patriarche de l'agriculture" *Studia Iranica* 16, 193–199.

Naveh, J. & Sh. Shaked (2012) *Aramaic Documents from Ancient Bactria*, London.

Орбели, И. А. (1963) *Документы с горы Муг : фотоальбом*, Москва.

Sims-Williams, N. (1997) *New Light on Ancient Afghanistan : The Decipherment of Bactrian*, London.

Sims-Williams, N. (2006) "Bactrian Letters from the Sasanian and Hephthalites Periods", in : Panaino, A. & A. Piras (eds.) *Proceedings of the 5th Conference of the Societas Iranologica Europæa held in Ravenna, 6–11 October 2003, vol. 1 Ancient & Middle Iranian Studies*, Milano, 701–713.

Sims-Williams, N. (2007) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan II : Letters and Buddhist Text*, London.

Sims-Williams, N. (2010) *Bactrian Personal Names*, Iranisches Personennamenbuch II/7, Wien.

Sims-Williams, N. (2012a) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan I : Legal*

and Economic Documents（revised edition）, London.

Sims-Williams, N.（2012b）*Bactrian Documents from Northern Afghanistan III : Plates*, London.

Sims-Williams, N.（2012c）"New Light on Ancient Afghanistan : The Decipherment of Bactrian", in : Hansen, V.（ed.）*The Silk Road : key papers*, Leiden/Boston, 95-114.

Sims-Williams, N.（2015）*The life of Serapion and other Christian Sogdian texts from the manuscripts E25 and E26*, Turnhout.

Sims-Williams, N.（2016）*A Dictionary : Christian Sogdian, Syriac and English*, Wiesbaden.

Sims-Williams, N. & F. de Blois（2018）*Studies in the Chronology of the Bactrian Documents from Northern Afghanistan*, Wien.

Sims-Williams, N. & D. Durkin-Meisterernst（2012）*Dictionary of Manichaean Sogdian and Bactrian*, Dictionary of Manichaean Texts III/2, Turnhout.

Sims-Williams, N. & J. Hamilton（2015）*Turco-Sogdian Documents from 9th-10th century Dunhuang*, London.

Smirnova, O. I.（1963）"La carte des régions du haut Zerafchan d'après les documents du Mt. Mugh", in : ***Труды Двадцать Пятово Международого Конгресса Востоковедов, Москва 9-16 августа 1960 г.,*** том II, Москва, 329-337.

Yakubovich, I.（2006）"Marriage Sogdian Style", in : Eichner, H. et. al.（eds.）*Iranistik in Europa, Gestern, Heute, Morgen*, Wien, 307-344.

Yoshida, Y.（2003）"Review : Sims-Williams, N., *Bactrian Documents I*, 2000, London", *Bulletin of the Asia Institute* 14, 154-159.

Yoshida, Y.（2009）"Sogdian", in : Windfuhr（ed.）*The Iranian Languages*, London/New York, 279-335.

Yoshida, Y.（2012）"Review : Lurje 2010a", *Bulletin of the Asia Institute* 21, 201-206.

岩井俊平（2004）「トハーリスターンにおける地域間関係の考古学的検討」『西南アジア研究』60，1-18。

稲葉　穣（2007）「ヤカウラングとリバーテ・カルヴァーン ――ハザーラジャート北部の歴史地理――」『オリエント』50/1，53-79。

榎　一雄（1952）「エフタル民族に於けるイラン的要素」『史学雑誌』61/1，1-26（『榎一雄著作集』1（中央アジア史 1），431-461，1992 に再録）。

桑山正進（編）（1998）『慧超往五天竺國傳研究』臨川書店。

水谷真成（訳注）（1971）『大唐西域記』（中国古典文学大系 22）平凡社。

宮本亮一（2014）『バクトリア史研究』博士論文，龍谷大学（http : //hdl.handle.net/10519/5671 最終閲覧：2018 年 5 月 7 日）。

宮本亮一（2015）「トハーリスターン行政地理研究序説」『東方学報』90，320-277。

宮本亮一（2018）「バクトリア語文書から見たトハーリスターン在地の支配階層」『オリエント』61/1，47-57。

吉田　豊（1999）「中央アジアオアシス定住民の社会と文化」間野英二（編）『アジアの歴史と文化』8，同朋舎，42-54。

吉田　豊（2006）「ソグド語の敬語について」白井聡子・庄垣内正弘（編）『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』京都大学文学部言語学研究室，81-94。

吉田　豊（2011）「ソグド人とソグドの歴史」曽布川寛・吉田豊『ソグド人の美術と言語』臨川書店，7-78。

吉田　豊（2013）「バクトリア語文書研究の近況と課題」『内陸アジア言語の研究』28，39-65。

Burial within the imperial tomb complex of the Northern Wei tombs on Mangshan was limited only to members of the imperial family and emperors' wives and maternal relatives, and there is no record of even influential Xianbei, to say nothing of Han people, being allowed to have accompanying satellite graves within the imperial tomb complex. Examining changes after the transfer of the capital to Luoyang, we see the greatest goal continued to be securing a burial site for the Xianbei who had moved south. In addition, we note that the Northern Wei dynasty first established the superiority of the imperial Yuan clan based on the configuration of tombs. Then, in the reign of Emperor Xuanwu another change was the existence of an area especially dedicated to imperial tombs. Next,during the reign of Emperor Kaoming, the emperor intervened in the selection of tombs for imperial kin. In this way the intent to determine the configuration of tombs consistently corresponds to the establishment of imperial power. Moreover, it is difficult to regard the placement of tombs as a reflection of the clan system as Su had claimed. It would be more appropriate to consider it a natural concentration of family tombs just as was the case with the Han people. In general, the Northern Wei tombs on Mangshan can be understood in the course of sinification, resembling the Han practice, in terms of tomb arrangement, structure, funeral ritual and so on, but with respect to tomb configuration and accompanying satellite graves, practices were distinct from those of the Han dynasty, functioning as one means to strengthen the emperor's power while resolving political problems at one time or another.

ΦΡΜΑΛΑΡΟ AND PRM'NΔ'R : A COMPARATIVE STUDY OF LOCAL OFFICIALS IN TUKHĀRISTĀN AND SOGD

MIYAMOTO Ryoichi

By grace of new information from the Bactrian documents which were deciphered and edited by N. Sims-Williams, we can now research several new subjects on the history, geography and society of Tukhāristān. In this article, we consider φρομαλαρο, which was one of the local officials in the region. Although we have new documents, these are not enough to allow us to investigate the title in detail. Therefore, we also deal with a Sogdian title prm'nδ'r mentioned in the Mugh documents, whose etymology is the same as φρομαλαρο, and then compare the functions of these two officials.

By examining the Bactrian documents which mention φρομαλαρο, we find that

the person who bore this title carried out or conveyed an order given by the local ruler and collected tax. Moreover, we can point out the possibility that φρομαλαρο might have made work a person being in a lower rank and there might have been several φρομαλαρος at the same time in several provinces called by þαρο/þαυρο in the Bactrian documents.

We can also find that Sogdian prm'nδ'r played much the same role as Bactrian φρομαλαρο in the local society with the exception of tax collection. Along with the exception, prm'nδ'r had a function which Bactrian φρομαλαρο did not have, that is collection and distribution of commodities or livestock, such as grain, wine, sheep, etc. However, considering the fact that we completely lack knowledge about the tax system in Sogd, we could regard the above-mentioned function of prm'nδ'r as a kind of tax collection. If so, we could say that the roles of two officials were almost identical.

THE CONCEPTION OF THE OVERLAND TRADE HELD BY THE GOLOVKIN EMBASSY : FOCUSING ON BUKHTARMA TRADE IN THE EARLY 19TH CENTURY

NAKAMURA Tomomi

After the Kyakhta Treaty in 1727, the Russian Empire and the Qing Dynasty maintained relations based on trade, and the trade in the sole border town of Kyakhta increased. At the end of the 18th century, however, Russia attempted to increase its profits by expanding trade, and this request came to the fore when the Golovkin Embassy was dispatched to the Qing in 1805-06.

In this paper I consider the Russian government's conception of trade in Asia in the early 19th century, focusing on the issue of the overland trade route between Russian Siberia and Sinkiang of the Qing. Firstly, I illustrate how and why the Russian government dispatched the embassy to the Qing. I then analyze the instructions and the documents written by top Russian government officials in order to grasp Russian policy toward Asia. Finally, I examine research on the overland trade route and Yu. A. Golovkin's position on the matter.

The conclusions of this paper are as follows.

(1) The purpose of the instructions given the embassay was to set up commercial centers for free trade along the border between Russia and the Qing,